

## フェデレーション杯観戦記

### ・サーヴァイ・アーグネシユを見る

プロテニスゲームを見るのは久しぶり。フェド杯に限れば一九八一年の東京大会以来となる。実に二七年振りだ。最近はテニスから遠ざかっているので、ブダペストでフェド杯の地域ゾーン大会(二〇〇八年1月27日〜2月2日)があるの知らなかった。音信不通だったハンガリー女子チーム監督のマハーン・ロベルトから連絡があり、招待券を回してもらった。今売り出し中のセルビアのイヴァノヴィッチやヤンコヴィッチが参加するし、何よりもハンガリーのホープ、サーヴァイ・アーグネシユのプレー振りに関心があつた。

### 東京大会の思い出

大会プログラムにテメシュヴァーリ・アンドレアのインタビュー記事が掲載されていた。彼女のテニスキャリアの中で一番思い出に残るのが、フェド杯東京大会だという。当時一五歳のテメシュヴァーリはフェド杯チームに抜擢され、この東京大会が国際的な晴れ舞台への初登場となった。一九八〇年に研究留学を終えて日本に戻る直前、マハーンからフェド杯監督のペーリ・シャンドールを紹介され、東京で会おうという話になった。ハンガリーの試合に合わせて、田園コロシアムに向かった。ルーマニアとの試合で、テメシュヴァーリは第1セットを取った

後、第2セット途中で足を痛め試合続行が不可能となった。監督に背負ってもらい、泣きながら控え室に戻る彼女を今でも覚えている。

テメシュヴァーリはこの大会から大化けして、1年も経ないうちに、世界のトッププレーヤーになった。フェド杯が終わってから銀座の焼肉屋で、ペーリ監督とテメシュヴァーリ、すでに他界したロージャヴルジ等の選手と食事をともにした。それにしても、ルーマニア戦途中、セットの合間に監督に声をかけたところ、待っていましたとばかりに鞆からパンフレット出して、車のブレーキと連動するストップランプを入手できないかと聞かれたのにたまげた。大事な試合の最中にこれだ。公私混同するハンガリー人らしいと呆れたのを覚えている。

マハーンとは息子が同じ幼稚園に通っていたことから知り合いになった。日本の神和住純や坂井利郎などと同年代で、一九七〇年代半ばに世界ランク30位前後にあり、全豪や全英選手権で彼らと対戦したキャリアがある。この時期には神和住、坂井、丸鬼等の当時の日本のトッププレーヤーたちがブダペストを訪れ、他流試合をしたこともあったようだ。フェド杯東京大会の翌年秋に日本へ遊びに来るとい

うので、神和住氏に保証人になってもらって入国ビザをもらった。法政大学の体育会テニス部で模範試合を企画して、当時の全日本学生準優勝の村田有季

う視点から見れば、短距離走を繰り返し行っているようなスポーツだから。

### 苦戦したセルビア

15カ国を4グループに分けて3日間のリーグ戦を行い、最終日にグループ1位4チームがプレーオフ進出(2チーム)をかけて最終日の戦いを行い、グループ最下位同士が降格(2チーム)を争う。それ以外のチームは同じ地域ゾーンに残留する順位戦になる。リーグ戦はシングルス戦2試合にダブルス戦1試合で行われる。

世界トップテン選手を2名擁するセルビアはポーランド、ルーマニアとの組み合わせになった。初戦のポーランド戦では実力を付けたラドヴァンスカ姉妹の健闘で、イヴァノヴィッチもヤンコヴィッチもフルセットの接戦になった。何とかヤンコヴィッチがラドヴァンスカ姉を振り切ったが、世界ランク3位と4位の二人が、世界ランク26位と252位に苦戦する姿は女子の実力伯仲時代を物語っている。

セルビアの苦戦は対ルーマニア戦でも続いた。選手のランキングで見ると、実力の違いははっきりしているのに、イヴァノヴィッチが世界ランク151位のニクレスクを倒すのに2時間40分もかかり、ヤンコヴィッチが世界ランク106位のキルステに敗れたために、ダブルス戦に勝敗が持ち込まれた。

このダブルス戦はハンガリー対スイス戦のセンター・コート隣のコートで行われたので、二つの試合を同時並行的に観戦することになった。押せ押せムードのルーマニアにたいして、ダブルス戦に慣れている

60万ドル)に参戦したサーヴァイは、1、2回戦を勝ち抜き、準々決勝で世界ランク8位のハンチュコヴァアと対戦した。

この試合、ハンチュコヴァアの出足が良く、第1セット1・4とリードされたが、ここから盛り返してタイブレイクに持ち込みセットを取った。続く第2セットはハンチュコヴァアが手首を痛めたために一方的なゲームになり、2セット連取で準決勝に駒を進めた。この対戦で過去1年間のトップテン選手との対戦成績は、4勝3敗となった。

続く準決勝の相手は、ロシアのデイメンティエーヴァ。一時ほどの勢いはないが、ここ1年は安定した戦いを進めていて、世界ランク11位を確保している実力選手だ。セットオールで迎えた最終セット、常にデイメンティエーヴァがリードする展開だったが、ゲームカウント5・5とタイにされてから、デイメンティエーヴァが消極的になり、強気のサーヴァイに押された。

世界ランク上位2選手を連破して、サーヴァイは決勝に進んだ。決勝の相手は1歳年上のロシアのチャクヴェターゼ。この試合もセットオールから第3セットに進み、2・2のゲームカウントまでまったく互角の試合だった。次の第5ゲーム目でサーヴァイがサーヴィスゲームを落としてから、シュニータの試合と同じように、一方的な展開になってしまった。相手の息がかなり乱れていたので、勝つチャンスはあったのだが、得意のサーヴィスで自滅してしまった。サーヴァイが崩れる典型的なパターンだ。

しかし、優勝こそ逃したが、全豪選手権の敗退で失墜しかけた昨年までの勢いを取り戻し、再び世界のトップと対等に戦える自信をつけたことは大きい

彦君が挑むことになったが、まだ現役のデ杯選手だったマハーンに村田君は手も足も出なかった。

### フェド杯の仕組み

デヴィスカップもフェデレーションカップも歴史は長いが、その仕組みは頻繁に改変されて、今は世界グループの1部(8カ国)・2部(8カ国)、世界グループの下部リーグに当たる世界を3地域に分けた地域ゾーン1部・2部・3部に仕訳されている。ちなみに、現在日本は世界グループ2部で、同じ時期に開催されたクロアチアとの戦いを制して、世界グループ1部昇格をかけて、世界グループ1部の初戦で負けたチームと戦う(プレーオフ)ことになる。フェド杯ランキングで見ると、日本が12位、ハンガリーが43位である。

今回ブダペストで開催されたのは、下部リーグのヨーロッパ・アフリカゾーン1部の大会である。15カ国が参加し、この大会を制した上位2チームが世界グループ2部昇格へのプレーオフ出場の権利を獲得し、下位の2チームが自動的に地域ゾーン2部に降格する。

各レベルのプレーオフは今年4月末に行われる。

### 会場と選手

大会はブシユカシユ競技場横にあるSyma体育館。冬場のヨーロッパでは屋外コートを確認できないから室内コートになった。ここに4面のカーベックコートを設置して、そのうちの1面をセンター・

ないヤンコヴィッチとイヴァノヴィッチのペアは大苦戦。最初のセットを失って、第2セットは漸くタイブレイクで奪取。主審の曖昧な判定にたいして、両陣営から激しい抗議が相次ぎ、主審の判定覆しに怒ったタスターゼ夫人(往年のプレーヤー、イリ・ナスターゼの妻)がマッチ・ダイレクターと小競り合いになり、大きな悲鳴が上がるなど、隣のコートは完全にヒートアップ。こういう騒動も国別対抗戦ならではの光景。ネットプレーが苦手のセルビアの2選手は、エンドラインでのラリーに終始しているから、実力の差がでない。最終セットのタイブレイクをかるうじて制して、グループ首位を確保した。午前10時に始まったこのマラソン熱戦は午後7時に終了した。この後、セルビアは最終日の対オランダ戦に勝利して、4月のプレーオフに進むことになったが、ダブルス戦に勝負が持ち込まれると、セルビアが勝ち進むのは厳しいだろう。

### 惜敗のハンガリー

グループ戦3日目に、グループ首位をかけてハンガリーはスイスと対戦した。スイスのエースはこのところ調子の良いパティ・シュニータ(世界ランク16位)。ハンガリーが第一試合に勝利し、サーヴァイとシュニータのエース対決になった。

若いと思っていたシュニータも今年で30歳だ。左利きから繰り出される回転のかかった打球が癖玉で、フォアの打球が外に逃げるから打ちづらい。サーヴァイはバックサイドのレシーブで、外に逃げるサーヴィスをうまく返球できずてこずっている。

この準優勝で世界ランクは2つ上がって18位の自己最高位になった。これからのトーナメントでポイント稼いでいけば、今年度中のトップテン入りは間違いないだろう。

フェド杯とフランスガス・オープンで負けパターンがはつきりした。エースを連続して取れるサーヴ力が裏目に出ると、ずるずると負けてしまう。セットを失うケースでは、ファースト・サーヴィスの成功率が30%ほどに落ちてしまう。チャクヴェターゼとの第1セットではダブルフォールトを7本も記録した。トップテンへの道はこの弱点の解消にかかっている。

### その後のアーギ

パリ大会の翌週がアントワープ大会(賞金総額60万ドル)、翌々週がドーハ大会(賞金総額250万ドル)と大きな大会が続いたが、この双方とも再び初戦で敗退してしまっ。スタミナがないのか、気持ちの持ち方に問題があるのか、それともトレーニングに問題があるのか。ドーハの初戦は杉山愛との初対戦だったが、第一セットを接戦で落とし、第二セットはサーヴィスが入らず、6・0で負けてしまった。第二セットの第一サーヴィスの成功率は30%を切っていた。この試合でサーヴィスエースはゼロだった。

ドーハでは軒並みシード選手が敗退している。連戦の疲れか、時差や暑さに負けたのか。上位選手と下位選手との差が縮まっているからかもしれない。ここまで順調に来たサーヴァイは大きな壁にぶつかったようだ。

コートと称して、その周辺に観客席を組み立てている。どんなに大きな体育館でも一つのフロアに4面のテニスコートを作るのは難しい。ぎりぎりのスペースになるから、センター・コート以外の3面はふつうのテニスクラブと同様に、観客席なしの隣接コートになっている。ボールが隣のコートに入ることもあるし、いろいろな歓声が混ざっていて、ふつうの大きな国際大会では経験できない雰囲気があった。主催国のハンガリーはすべてセンター・コートで試合ができるというメリットを享受していた。

意外だったのは選手の体格。ヤンコヴィッチやイヴァノヴィッチなど大柄な選手が多いと思っていたが、フロアから見ても体格的にはそれほど大きさを感じなかった。ヤンコヴィッチは公称178センチとあるあるが、テレビで見るとはるかにスリムだから、逆に「意外に小さいな」というのが実感。

イヴァノヴィッチは確かにヤンコヴィッチより一回り大きいですが、彼女もテレビで見るとはるかにスリムだ。サーヴァイは171センチだから小柄な部類に入るが、他国の選手を見ても、ほとんど全員がスリムの一言に尽きる。それなりの身長があるのだから、とにかく体の線が細いので体格的な威圧感がない。だから小柄な日本選手でも世界で戦えるのかと納得した。これは他のスポーツでは考えられないことだ(バスケット、ヴァレーボール、ハンドボールなどは、体格の差が目瞭然だが)。

スリムな体のどこから力が出るのかと思うほど、十代の若い選手が思いきりラケットを振っている。テニスのシングルスはコートカバーがきついため、スリムな体でないとなえられないだろう。走るといった。第1セットを失ったが、強烈なサーヴィスとフォアストロークのエースを連発して第2セットを物にしてタイとなった。第3セット最初のゲームでシュニータのサーヴィスを破って、このままサーヴァイが行くかと思つたが、次のサーヴィスゲームを接戦で落としてからはサーヴィスが乱れズルズルと後退して負けてしまった。この最終セット第2ゲームをしつかり取つていれば勝てた試合だったが、まだ若いということか。ハンガリーは次のダブルス戦でも最終セットまで持ち込んだが、最後はスイスに逃げられた。スイスは最終日の対スウェーデン戦にも勝利して、プレーオフへと駒を進めた。

サーヴァイはまだ発展途上にある。サーヴィスとフォアのストロークは威力十分でトップテンの力はあるが、サーヴィスの安定性とバックストロークの迫力に欠ける。シュニータにその弱点を突かれた。しかし、小柄な割にパワーがあり、バックストロークに力が加われば、もっと安定して戦えるだろう。

期待された年初の全豪オープンでは、単複とも初戦で散ってしまった。それもランキングでかなり下位の選手に負けてしまった。弱点を徹底的に克服しないと、上位を伺うのはもちろん、台頭する下位の選手にも足をすくわれるだろう。フェド杯にかんする限り、ハンガリーにはもう1枚選手が欲しい。

### パリ・フランスガス・オープン

フェド杯を観る限り、格下選手3名に完勝し、シュニータとも互角の試合をしたサーヴァイは、年初のスランプを抜け出したように見えた。フェド杯翌週に開幕したフランスガス・オープン(賞金総額